



ため原形は不明である。樹種はヒノキ科アスナロ属である。

なお、釈読にあたっては、奈良文化財研究所の渡辺晃宏・吉川聰・山本崇名氏のご教示を得た。写真は同研究所の中村一郎氏による。

9 関係文献

富山市教育委員会『富山市小出城跡発掘調査報告書』(二〇〇七年
刊行予定)

新潟・春日山城跡

かすがやまじょう

所在地 新潟県上越市大豆字春日山ほか

1 調査期間 一九八四年（昭59）七月～一二月

2 発掘機関 上越市教育委員会

3 調査担当者 小島幸雄

4 遺跡の種類 城郭跡

5 遺跡の年代 中世・近世

6 遺跡及び木簡出土遺構の概要

春日山城跡は、高田平野東縁に南北に連なる西頸城丘陵の一角に築かれた広大な中世城郭遺跡で、戦国大名上杉謙信の居城として著

名な山城である。その築城

時期については諸説あるが、

永正七年（一五一〇）に長

尾為景による大普請があつ

たとされており、少なくと

も永正年間以前には山城と

して機能していたようであ

る。城の居城化は、永禄三年（一五六〇）に始まる謙



(高田西部)

165

信の普請からで、永禄七年には一応の居城化が達成されたものと考えられている。

木簡は、通称「監物堀」と呼ばれる堀によつて囲まれた西惣構内堀地区に位置する楼門内郭の井戸（第八次調査S-E四二）から出土した。現在、この地点は「春日山城史跡広場」として整備・公開されている。共伴遺物がないため明確な時期比定は難しいが、楼門内郭の形成時期が景勝期の天正六年（一五七八）以降と考えられ、慶長一二年（一六〇七）の福島城への移城による春日山廃城までが内郭の存続期間と判断されることから、一六世紀末葉頃に使用・廃棄されたものと考えられる。この想定は、内郭から出土した土師質皿、瀬戸美濃・越中瀬戸・越前焼などの土器・陶器類の年代観とも矛盾しない。

8 木簡の釈文・内容

- (1)
• 「▽小□□□代物□

(142)×29×6 039

下部が欠損しているが、全体の遺存状況は良好である。荷札木簡で、頭部に両側から一对の切り込みを入れている。材は板目材と思われ、表裏両面と側面を頭部から縦方向に薄く削った痕跡が認められる。裏面に「米七升」とあることから、品目は白米と思われる。



表面は差出人が記されている可能性が高いが、墨痕が薄い箇所が多く判読し得ない。

なお、釈読にあたっては、上越市公文書館準備室の福原圭一氏・山本幸俊氏よりご教示を得た。

9 関係文献

上越市教育委員会『国指定史跡 春日山城発掘調査概報Ⅸ』（一九八五年）
金子拓男「春日山城」（『上越市史叢書』八、考古一中・近世資料一、一〇〇三年）
(笛澤正史)